



日本語学級

日本語学級は、福生第一小学校、福生第二中学校に
設置してある通級指導学級です。



日本語学級は、外国人児童・生徒等がそれぞれの在籍校や学級の中でスムーズな学校生活を送ることができるように日本語の指導を目的とした学級である。福生市では、福生第一小学校と福生第二中学校に設置している。また、福生第三小学校においては、令和7年度から日本語指導加配教員による日本語指導を行っている。さらに、福生第二小学校においては、令和8年度は、日本語指導加配教員による日本語指導を行い、令和9年度に新たに日本語学級を設置する予定である。

学級の概要

対象者	福生市立小・中学校に在籍し、日本語の習得が十分ではない児童・生徒
指導方法	学区域の学校に在籍し、福生第一小学校、福生第二中学校へ通級する
指導時間	週あたり8時間を上限とする
通級期間	原則通級を開始した日から2年間
通級方法	小学校1年生から3年生は原則保護者による送迎



日本語学級の掲示（福生第一小学校）



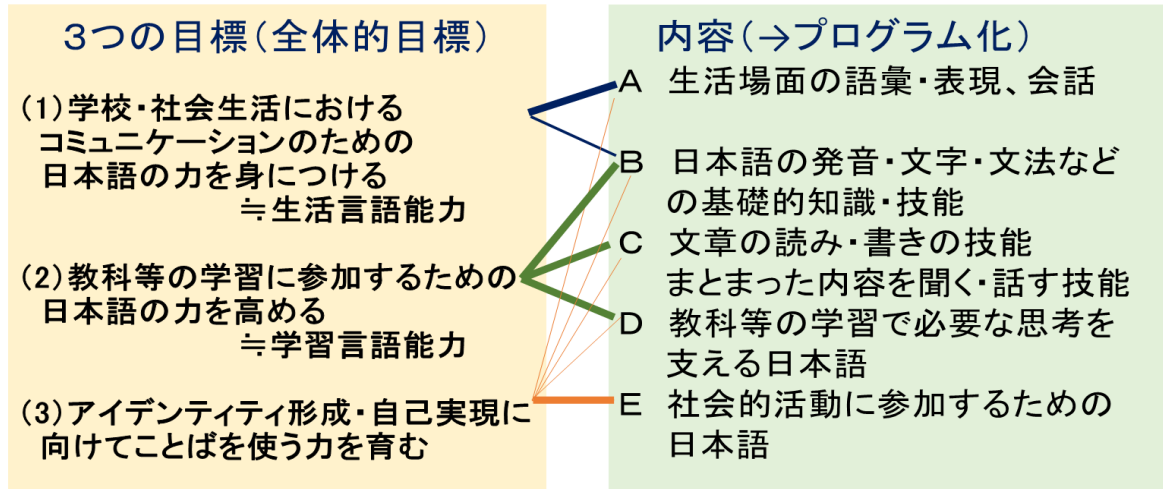
日本語指導の様子（福生第二中学校）

日本語指導に関する基本的な考え方

外国人児童・生徒等は多くの時間を在籍学級で過ごします。外国人児童・生徒等への指導・支援は、担当教員のみが行うのではなく、全ての教職員が当該児童・生徒への理解を深め、組織的に取り組む必要があります。その上で、日本語学級等での指導内容や成果、児童・生徒の様子等を学校全体で共有するとともに、児童・生徒の多様性を尊重した生活指導や進路指導などを実施します。これらのことを実施するためには、校長が作成する学校経営方針に多文化共生や、外国人児童・生徒等の対応についての方針を明確に位置付けた上で、管理職、学級担任、学年や担当分掌の教員、養護教諭等が連携し、在籍校か日本語学級設置校かに関わらず、全ての教職員が指導・支援の当事者であるという意識をもって取り組むことが重要です。

日本語学級での指導内容

日本語学級では、「特別の教育課程」を編成して指導を行う。「特別の教育課程」を編成するにあたっては、個々の児童・生徒の日本語能力に応じた具体的な目標や内容等を基に「個別指導計画」を作成する。



文部科学省 外国人児童生徒等教育に関する研修用動画コンテンツ「日本語指導の方法Ⅰ」より

発達段階ごとの児童・生徒の目指す姿

発達や成長を見据えて教育の連続性を重視し、目指す児童・生徒の姿を共有する。

小学校	中学校
<p>生活を送ることから学習への参加へ</p> <p>生活に必要な日本語を学びながら、仲間との対話や協働学習を通して、コミュニケーションや学習に参加するための日本語の力を高めることを目指す。</p>	<p>学習参加から自己実現に向けて</p> <p>生活や学習に必要なことばを獲得しながら、将来なりたい姿をイメージし、思考し探究するためのことばの力や学力の向上を目指す。</p>

「日本語指導推進ガイドライン」(令和6年6月 東京都教育委員会)を参考に作成

生活言語能力と学習言語能力

日常会話の力「生活言語能力」と学習で求められる力「学習言語能力」は、違うと言われている。どちらも豊かな言語環境が必要となるが、教職員による支援のもと「生活言語能力」は、ある程度は日常の生活の中で身に付くと言われている。一方、「学習言語能力」は、生活の中で身に付きにくく、計画的な指導・支援が必要である。

日常生活のことば	生活言語能力	授業のことば	学習言語能力
⇒習得に2年程度かかる		⇒習得に最低でも5年程度かかる	
(例)		(例)	
・温める、冷たくなる		・熱する、冷却される	
・「それ、持ってきて!」		・「三角形ABCで、辺BCを底辺とするとき・・・」	

文部科学省 外国人児童生徒等教育に関する研修用動画コンテンツ「外国人児童生徒等教育の考え方」を参考に作成

タイプ別に見る 日本語指導モデル

「日本語指導推進ガイドライン（理論編）」（令和6年3月 東京都教育委員会）に示されている「日本語指導が必要な児童・生徒 3つのタイプ」に基づき、指導事例を掲載する。

日本語指導が必要な児童・生徒 3つのタイプ

日本語指導が必要な児童・生徒の実態は一人一人異なる。日常会話や、教科学習の日本語の力等の実態を把握し、指導・支援することを前提に、滞日期間と日本語の力の発達の状況から、日本語指導が必要な児童・生徒を大きく3つのタイプに分類して示す。

タイプA

来日直後

・日本での学習経験がなく、日本語もこれから学ぶ児童・生徒

滞在期間3年程度

タイプB

・日本の生活では支障のない程度の日本語の力がある。

・教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。

タイプC

日本生まれ・日本育ち

・日常会話に支障がなく、適切な指導・支援を受けてこなかったため、学習言語能力が十分に育っていない。教科学習面では成功体験があまりなく、周囲からは「意欲がない」といった見方をされがちである。

3つのタイプと発達段階を組み合わせた事例

「日本語指導推進ガイドライン（実践編）」（令和7年3月 東京都教育委員会）には、3つのタイプと発達段階を踏まえた指導事例が掲載されている。以下は、本市の事例（中学生・タイプB）である。

【1】対象生徒について

1 生徒の実態

- 日常生活では支障のない程度の日本語の力がある。
- 教科の学習への参加には、十分な日本語の力はまだ獲得できていない。



中学生

タイプB

2 日本語指導の目標（「個別の指導計画」日本語指導の目標）

- ①学校の様々な生活場面に適した語彙・表現を知り、部活動や行事、委員会活動等に積極的に参加することができる。
- ②教科の内容を理解するための日本語の知識・技能の力を高め、それを運用しながら、母語や母国での学習経験を生かして、学年相当の教科学習に、支援を受けながら参加することができる。
※ 本単元は②に基づき、「内容と日本語の統合学習」の授業の一環として実施
- ③自分の考えなどを周囲に伝えたり、母語や母国で身に付けてきた知識や経験を活用したりしながら、中学卒業後の進路に向けて学習等に取り組むことができる。

3 指導形態

週2回 合計2時間、自校 グループ学習



【2】本単元について

「竹取物語」は中学1年生が初めて触れる、古典の基礎とも言える作品である。日本語学級に通う生徒にとっても、古典学習のスタートとして、「竹取物語」に触れることで、親しみを感じ、その後の関心や意欲になると期待できる。学年相当の物語文や説明文ではなく、他の生徒にとっても触れる機会が少なく、これから本格的な学習が始まる古典を扱うことで、国語科の学習に対する苦手意識の軽減も図れる。

また、絵本の「かぐや姫」を利用することで視覚的に理解を促す工夫ができる。ただし、物語全体では長すぎて取り扱うことが適当でない場合は、あらずじが端的にまとめられている他の資料を併用するなど、リソースの組み合わせも有効である。また、教科書の現代語訳については、生徒にとって難解な部分もあるため、リライトを準備して読みやすくする支援も重要である。

【3】日本語指導案

1 単元名

JSL国語科 第1学年「昔のことばと現代のことばを比べよう」

2 単元目標

【教科(国語科)】

- 日本の古典がどのようなものかを知ることができる。
- 現代の文章と古典を比べ、その違いや共通点に気付くことができる。

【日本語】

- 現代の文章と古典を比べ、その違いや共通点を見付け、日本語で表現することができる。
- 古典の学習をするために必要な語句を理解することができる。



語彙	表現
古典、かぐや姫、竹取物語、古典、現代文、歴史的仮名遣い、文末表現	・～は～だけれど、～は～です。／～も～も～は同じです。

3 展開

主な学習活動	指導・支援の工夫
1 これから在籍学級の国語の授業において、「古典」について学習することを知らせる。	●「古典」とは何かを簡単に説明する。
2 学習のめあてをつかむ。	
3 「月」について知っていることを話す。 ・「月」について分かること ・「月」の陰は、何に見えるか ・「月」に関係する祭り ・「月」をテーマにした物語等	●出身国や地域の「月」にまつわる話等を話すことで、「月」への興味・関心を高める。 ●必要に応じて教員が事前に調べた生徒の出身国の「月」に関する情報をスライド資料で提示する。
4 「かぐや姫」の物語について知る。	●NHK for School（「おはなしのくにクラシック」竹取物語）の資料を基に、概要を確認する。
5 「竹取物語」の冒頭部分の朗読動画を視聴する。	●動画を視聴することで、言葉が分からなくても映像を通してイメージをもつことができるようにする。
6 「竹取物語」の冒頭部分の音読をする。	●冒頭の朗読部分のみ取り扱う。 ●冒頭部分の音読をする。現代とは違う古典のリズムを感じられることに重きを置き、正しく音読できなくてもよいこととする。

日本語学級入級の流れ

日本語学級への入級までの手続きは次のとおりである。

